



実りの秋を迎えた柿畑

SNS活用や生産者団体との連携で「日本一の柿のまち」を広くアピール

秋の味覚を代表する果物、柿。夕陽を凝縮したような美しいオレンジ色の実が秋空に映える風景は、私たちの郷愁を誘わずにはられない。柿といえば子規の「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」から、古都・奈良を思い浮かべる人も多いだろう。その奈良県中西部に位置する五條市は、「日本一の柿のまち」として知られる。とりわけ、7月はじめから出荷が始まるハウス柿は、全国シェア約9割と追随を許さない。市では生産者団体や県とも緊密に連携しながら、柿によるまちづくりを進めている。意欲的な若い後継者もたくさん育っているが、さらに長期的な視野で人材を育成しようと、2021年度には五條市立西吉野農業高校が開校する。

奈良県
五條市



(左) 日本一の収穫量を誇る五條市の柿
(右) 五條市を中心とした「奈良の柿」を積極的にPR



旧西吉野村の編入で 日本一の柿の産地に

五條市は1957年、いわゆる昭和の大合併に伴って誕生し、2005年には吉野郡西吉野村・大塔村を編入した。それ以前から柿の生産は盛んであったが、旧西吉野村（現五條市西吉野町）が柿の一大産地であり、合併したことで「日本一の柿のまち」が現出した。

柿栽培の歴史は1919（大正8）年ごろから始まる。今は梅林でも知られる西吉野町賀名生地区は、当時みかんの栽培や養蚕が主産業であった。ところが、冷害でみかんの木が壊滅的な被害を受け、気候風土により適合した果樹品目への転換を余儀なくされた。そこで選ばれたのが富有柿だったという。

戦後の復興期には樹園地の造成が盛んになり、1974年からは国営五条吉野総合農地事業が開始された。同事業の契には、次のようにその目的が記されている。

「本地区は、奈良県中西部に位置し、吉野川沿いの標高130m～500mの中山間地帯で、山林・原野とこれに隣接した既成果樹園で占められていて、全国でも有数の柿の主産地となっている。

しかし、優良農地が少なく経営規模が零細であることや、かんがい用水が確保されていないことから、品質・収量面においての立ち遅れなど、農業の近代化が図られないままとなっていた。

このため、国営総合農地開発事業によって、樹園地を造成し受益農家の経営規模の拡大を図るとともに、畑地かんがい施設の整備を行うことによって生産性の向上と農業経営の安定を図るものである。」

事業が完了したのは2002年3月末。農地の造成は計680ha（うち現五條市域が567haで、残りは下市町）に及び、かんがい用の一の木ダムや用水路も整備されて、造成農地や既成畑地に安定的に給水できるようになった。また、1980年ごろには渋柿の優良品種として刀根早生が誕生した。従来の主力品種である平核無^{ひらたねなし}の枝変わりとして出現したもので、この品種によってハウス柿が生産されるようになった。こうしたことも相まって、日本一の産地へと発展していったのである。

年間約2万5,000tを生産 半年間にわたって出荷が可能

五條市における柿の収穫量（県全体の収穫量をもとに栽培面積で案分した推計値）は、ここ数年2万5,000t前後で推移している。都道府県別で見ると収穫量が最も多いのは和歌山県だが、同市によると和歌山県の市町村別収穫量はかつらぎ町が最も多く1万5,000t弱、次が橋本市、紀の川市のそれぞれ1万1,000t余り。市町村別で見ると、五條市は群を抜いて文字通りの「日本一の柿のまち」となる。

柿農家の数は642戸（自給的農家を含む。2015年農林業センサス）で、総農家数の34%（同）を占め

る。栽培面積は約1,430ha。7月になるとハウス柿の出荷が始まり、8月のお盆の頃を中心に需要が高まって高値で取り引きされる。9月中旬になると露地柿の収穫がスタートし、12月末の冷蔵富有柿まで、トータルで約半年間にわたって出荷できるのが大きな強みだ。

また、樹齢が90年を超えるような老木については、新しい苗に植え替える「改植」が順次行われている。新たな品種の導入についても、県の果樹・薬草研究センターで新品種開発の取組みが行われており、数年後には栽培が始まる見通しという。

このような安定した生産体制を確立するための努力や、大規模経営により比較的高収入の農家が多いといった事情もあって、非常に多くの後継者が育っていることも特筆される。同世代の若い生産者たちが良きライバルとして切磋琢磨し、刺激し合いながら技術向上を目指すことで、品質が向上し地域のブランド力が高まる。それが魅力となってさらに意欲ある後継者が集まる、という好循環が生まれているようだ。

前述のように、ハウス柿の生産はほぼ五條市の独壇場と言える。熱意ある地元の生産者が試行錯誤を重ねて、1981年に生産技術が確立したと伝えられる。生産量は年間約500tで、他地域では和歌山県や静岡県で少量が生産されている程度。真夏に出荷されるという时期的な希少性もあり、付加価値の高いフルーツとして市場で好評を博している。

ハウス柿のほとんどを占める刀根早生は渋柿であるため、渋抜きをした上でそのまま食べられる状態で出荷される。その肉質は緻密で柔軟多汁、露地栽

培の同品種より甘みが強く、種子が退化するため種なしで、日持ちも比較的優れているなど、食味等の面でもいくつもの利点を持つ。

例年は空輸による東京市場への出荷が中心だが、2020年は新型コロナウイルス問題の影響を受け、出始めの7月上中旬についてはトラックで関西市場に出荷していた。ただ、7月下旬からは東京も含め全国に出回るようになった。

県知事が東京・大田市場で 自らトップセールス

奈良県も、五條市を中心とした「奈良の柿」を積極的にPRしている。たとえば、県では品質も外観もとびきり優れた地場産品をリーディング品目と位置づけ、「奈良県プレミアムセレクト」として認証する制度を設けている。現在認証されているのはたった6品目で、うち2つが富有柿とハウス栽培刀根早生柿だ。

2012年度からは、荒井正吾知事によるトップセールスも行われている。知事自ら日本最大の青果市場である東京・大田市場に出向き、JAと連携して奈良県産の富有柿やハウス柿をPRするもの。2013年度からは五條市や地元の生産者団体も加わり、毎年実施されている。

2013年度からは、奈良県農産物生産・流通部会果樹部会が中心となって毎年首相官邸を表敬訪問。「奈良の柿PRレディ」が首相に柿を贈呈している。2019年11月14日に7回目の表敬訪問を行った際は、試食した当時の安倍首相から「コクのある甘さで、い



安倍首相（当時）に柿を贈呈する「奈良の柿PRレディ」



都内にある奈良県のアンテナショップでの物産イベント

(左) 柿の形をした柿博物館
(右) 多くの人で賑わう「柿の里まつり」



つもよりジューシー」との感想が寄せられた。

東京・日本橋にある奈良県のアンテナショップ「奈良まほろば館」では、毎年11月に富有柿の販売を行っている。消費者の評価も高く、固定ファンも増えつつあるようだ。

前述の奈良県果樹・薬草研究センターは、五條市内で柿博物館も運営している。より多くの人たちに柿のことを詳しく知ってもらおうと2004年に開館した施設で、外観そのものが柿の形と色をしていてインパクト絶大だ。館内では、レーザーディスクやコンピュータを駆使した映像を60型の大型テレビ画面に映し、柿の歴史や特徴、栽培方法、利用方法などを紹介している。

また、樹齢100年の柿の木の切り株や国内外の様々な品種の実の実物（収穫期のみ）などの展示、同センターの研究内容に関する展示などもある。柿の幅広い利用法の1つに柿渋があり、古くから染料として使われてきた。実からは柿酢も作られ、柿の葉は柿の葉ずしや柿の葉茶などに利用できる。博物館では、こうした幅広い柿の用途についても学ぶことができる。

若手生産者による「柿の里まつり」は5,000人が来場するイベントに成長

生産者の団体としては、1999年に設立されたJAならけん西吉野柿部会などがある。約280人の生産者が所属する同部会では、生産技術向上のための研修

会を定期的に行っている。たとえば2020年1月16日には、剪定講習会が開かれた。質の良い柿を作るためには、1年を通して様々な作業がある。冬季の施肥、春の摘蕾や枝剥皮、夏の受粉や摘果、夏季剪定、添え木設置、秋の収穫、春先から夏にかけての消毒など。

その中でも、葉が落ちている間に行われる冬季の剪定は重要な意味を持つ。剪定の目的としては、次のようなものがある。①日当たりや風通しの良い園地・樹を作る、②実をつける枝（結果母枝）を適正な数で配置する、③作業性の良い園地・樹を作る、④枝を更新することで樹を若く保つ。

剪定講習会では、奈良県南部農林振興事務所の技術者や西吉野柿部会生産部のベテラン農家が講師役を務め、たくさん生産者の前で実際に剪定のコツを伝授するとともに、実習でアドバイスを行った。

毎年11月下旬に行われる恒例イベント「柿の里まつり」も、同部会の青年部が主催しており、2019年で18回目を数えた。会場はJAならけん西吉野柿選果場で、まつりのメインはもちろん、新鮮な柿を安価で買うことのできる直売コーナー。特に1,500円の詰め放題は当初からの人気企画だ。KakiCafeは若手農家を中心となって企画したコーナーで、柿クレープやオリジナルドリンクなど柿をふんだんに使ったメニューが売り物。毎年5,000人ほどの来場客で賑わうという。

青年部は、20歳から45歳までの若手生産者で構成され、2001年に設立された。当時は景気の低迷に

よって贈答用の柿の需要が減少し、市場では大玉より小玉が好まれるようになるなど、新たな課題に直面していた。次代を担う生産者が集って将来を見据えた戦略を考えようというのが、設立の理由だ。そして、西吉野が柿の一大産地であることをもっと知ってもらおうと、2002年から「柿の里まつり」が始まった。

選果や消毒などの作業は 人手に頼るしかない現状

まつりの会場である選果場の敷地内には直売所があり、毎年露地柿の出荷シーズンである9月下旬から12月上旬までオープンする。この直売所も、青年部の発案で作られたものだ。「柿の里まつり」の知名度が高まるにつれて、直売所の売り上げも伸びていき、今では重要な販売拠点になっているという。

この西吉野選果場は、JAの施設ではあるが運営は地元生産者が中心となって行われている。みかんであれば機械で自動選果できるが、柿の場合はヘタがついているため人手に頼るしかなく、露地柿の出荷シーズンである9～11月は選果にあたる人員を確保することが重要な課題となっている。交通の不便な山奥に位置するため通うのも大変で、またこうした

季節労働者が泊まれるような施設も周辺にはない。

柿は病虫害に弱く、年間を通しての消毒作業が欠かせないが、これも現在は農家の人たちがスピードスプレーヤーと呼ばれる、ポンプからの薬剤を送風機で均一に散布する車を運転して行っている。ドローンは、今のところ樹の上からしか散布できないので使えないとのこと。

選果や消毒といった手のかかる作業をいかに機械化するかは、「柿のまち」を将来にわたって持続していくための大きなポイントと言える。

マスコットキャラクター「カッキー」が 毎年市内の保育所・幼稚園を訪問

五條市でも、これまで紹介してきた県や生産者団体による取組みの支援を中心に、「日本一の柿のまち」を内外にアピールしている。その核となっているセクションが、農林政策課内に設けられた柿振興室だ。2019年6月からはインスタグラムを開設し、柿の生育状況やPR活動に関する写真をこまめにアップしている。2020年7月には、ハウス柿を10名にプレゼントするキャンペーンを、インスタグラムなどを通じて展開した。五條市柿振興室の北川慶弥さんは、次のようにインスタグラム開設のねらいを説明する。



保育所を訪問する市のマスコットキャラクター「カッキー」



五條市柿振興室の北川慶弥さん

「奈良県や五條市が柿の産地であることを知らない方がまだまだ多いのが現状です。もっと多くの人に五條の柿を知ってもらい、シーズンになったら食べてもらうことができるよう、SNSでの情報発信に力を入れていくことにしました」

ハウス柿のキャンペーンでは、応募者から「ハウス柿というものがあるのを初めて知った」などのコメントが多数寄せられた。こうして今まで知らなかった層に啓発できているという実感が得られるのがSNSの良さであり、このことは生産者にとっての励みにもつながっている。

五條市独自の取組みとしては、2016年度から始まった農林水産大臣表敬訪問がある。その前年、当時の森山裕農林水産大臣が西吉野選果場を視察したことがきっかけとなり、7月に大臣及び奈良県選出国會議員にハウス柿を贈呈してPRを行うようになった（ただし2020年は、新型コロナウイルス問題の関係で中止）。

前述の「柿の里まつり」をはじめとする各種イベントなどでは、五條市のマスコットキャラクター「カッキー」が活躍している。頭の部分がそのまま柿の形をしたカッキーは、旧西吉野村のシンボルキャラクターとして誕生し、五條市にも引き継がれた。

この親しみやすいキャラクターを活用して、2011年度からは「カッキー保育所訪問」が行われている。市の観光案内所のスタッフや市職員がカッキーの着ぐるみを着て市内の保育所や幼稚園を訪問し、柿を子どもたちにPRする企画だ。当日は給食のときに柿を児童みんなにプレゼントし、カッキーが子どもたちとふれあいながら五條市が日本一の産地であるこ

とを知ってもらおう。2019年度も、9月から11月にかけて11の保育所・幼稚園を訪問した。「10年近く続けてきて、かなり市民の間に『柿のまち』が浸透してきているという手応えがあります」と北川さん。

五條高校賀名生分校を再編 西吉野農業高校として独立

「日本一の柿のまち」を維持していく上での課題としては、前述のように機械化の推進が1つ。もう1つの大きな課題は若手の育成だ。全国の農業地域としては特異なほど若手後継者に恵まれているのが現状とはいえ、長期的視点に立てば、さらにその次の代の後継者を今のうちから養成していく必要がある。その点で注目されるのが、五條高校賀名生分校の再編だ。

同校は1950年、奈良県立五條高校の昼間定時制高校として開校した。本校は県立だが賀名生分校は五條市立（開校当時は西吉野村立）。農業科と家庭科があったが、2018年度から農業科のみとなり、果樹農業者を対象に県外生の受け入れを始めた。こうした動きをさらに進めて、2021年度からは五條市立西吉野農業高校として独立する。農業科のみの4年制昼間定時制で、募集要項では次のように趣旨を記している。

「日本一の柿生産を誇る五條・西吉野で実習中心・就労可能な教育を地元農家の協力で行い、果樹を中心に野菜・草花の生産・経営などを4年間実践的に学び、農業の担い手としてその成果を地域に返す熱意と意欲のある生徒を募集します」

生徒は全国から募集し、宿舎も用意。卒業後の就職先も斡旋する。五條市そのものが3万人を割り込むまでに人口減少を続けており、農業人口を少しでも増やすことでまちの活性化につなげたいという思いは切実だ。

最後に北川さんは、次のように語ってくれた。

「柿は、病気に対する免疫機能を高めると言われるビタミンA（β-カロチン）をはじめ、ミカンの約2倍のビタミンC、ポリフェノール、カリウムなどが豊富に含まれた栄養たっぷりの果物。五條の柿をたくさん食べて、様々な病気に負けない身体を作ってほしいですね」